

ルーブリックを活用した授業実践とパフォーマンス評価 —学習者の自信形成と教師の協働を目指して—

41725008 高井 一雄

1. 研究の背景と目的

1.1 研究の背景

学習指導要領（平成 29 年告示）では、育成を目指す資質・能力の 3 つの柱が示され、教科それぞれの知識や技能を確実に習得しつつ、思考力や判断力などを育み、「学びに向かう力」を伸ばすことがうたわれている。筆記試験だけでは測定しにくい資質・能力を育成する上で、学習者のパフォーマンスにより、それら进行评估する方法は今後ますます重要になると考えられる。「生徒の英語力向上推進プラン」（文部科学省，2015）では、生徒の英語力の着実な向上を目指し、生徒の英語力に係る目標の設定と公表を都道府県に要請することが示された。「英語教育改善プラン」（富山県，2018）では、教員が統一した基準で学習者の英語力を適切に評価することが、学習者の英語学習に対する意欲向上につながることから、パフォーマンステストの必要性が強調されている。

1.2 先行研究

1.2.1 パフォーマンス評価

パフォーマンス評価について松下（2007）は、「ある特定の文脈のもとで、様々な知識や技能などを用いて行われる人の振る舞いや作品を、直接的に評価する方法」と述べており、その目的はパフォーマンス（振る舞い）の質を数値化することであり、学習指導や学習活動に生かすために子ども達の学力の状態を把握することであると主張している。

1.2.2 ルーブリック¹の学習促進効果

Arter ら（1994）の研究では、「書き方ルーブリック」を活用して子ども達に自己評価や相互評価をさせ、改善策を考えさせた結果、ルーブリックにおけるいくつかの観点において統計的に有意な改善が見られたことが報告されている。このことから、ルーブリックは児童・生徒のライティング技能の向上に寄与すると考えられる。

神宮（1993）は、学習者が何らかの「差異」が生じていることに「気づき」があることで、それを解消しようという自己調整機能がはたらくと述べている。ルーブリックの活用により、そのような気づきを促す効果が期待できる。ただし、安藤（2014）は「教師は、目標に接近させるという形成的な意識を持って、どのようなルーブリックをどのような場面で使うのかという枠組みを見据えておかなければならないのである」（p. 11）と主張している。

1.2.3 言語学習と動機付け

神宮（1993）は学習を成立させる条件の一つとして「意欲」を挙げており、「行動を変化させたいという意欲を持っていない状況でいくら練習しても学習はあまり効果的ではない」と主張している。第 2 言語習得という側面から見ても動機付けは重要であると考えられている。Dörnyei（2001）は、十分な動機づけがあれば、学習者本人の言語能力や認知的な特徴に関わらず、実用的な知識獲得に成功する機会が多いとして、動機づけの重要性を述べている。ルーブリックを提示して学習の見通しを持たせることや、パフォーマンス評価を活用して達成感を感じることで、学習者の意欲を高めることにつながると考えられる。

¹「成功の度合いを示す数値的な尺度（scale）とそれぞれの尺度に見られる認識や行為の特徴を示した記述語（descriptor）からなる評価指標のこと（田中，2005）。」

1. 2. 4 パフォーマンス評価の実践と教師の協働

栗本・石井（2017）の実践報告「パフォーマンス課題を取り入れたより良い評価に向けた取り組み」によれば、教員間の協働体制構築において「生徒の変化」が有効であり、「生徒への効果が目に見えて感じられると、新しい取り組みに対して賛同を得ることができた」と報告されている。パフォーマンステストを英語科全体で取り組むことで、教育目標や教育観についても共有する機会が増え、目標を共有することが協働を促すことにつながると考えられる。

2. 研究の目的

本研究では、パフォーマンス評価を活用し、「英語を使うこと」目的として授業を展開し、次の1～3を明らかにすることを目的とする。

1. パフォーマンス評価を行うことで、生徒の英語で話す力はどのように変化するのか。
2. パフォーマンス評価を行うことで、英語で話すことへの生徒の意欲にどのように変化するのか。
3. パフォーマンス評価を英語科の取り組みとして行うことで、英語科教員の協働や連携にどのような変化が見られるか。

3. 研究の方法

3. 1 パフォーマンス評価と授業実践

3. 1. 1 パフォーマンス評価とルーブリック

生徒の英語力での要約力を測定するために、ルーブリックを用いてパフォーマンス評価を行った。時期は1学期中間考査後（5月中旬）と期末考査前（6月下旬）、2学期末考査前（11月下旬）であった。パフォーマンス課題は、教師と1対1の対面形式で、学習した本文内容を英語で要約することであった。テストの際には教科書内容の概要を示すイラストをテスト受験者に渡し、参照しながら要約を行ってもよいこととした。ルーブリックの作成にあたっては、中高生の英語スピーキング力を評価するインタビューテスト「HOPE」（今井ら、2007）の「HOPE 評価基準表一覧²」を参考にし、研究用ルーブリック（表 3.1）を作成した。

表 3.1 研究用ルーブリックの例
（Lesson1）

	目線	内容
A	全くメモを見ないで発表できる	感想や意見を述べている
B	メモを見ないで発表している	宇宙食の例や工夫について説明できている
C	ずっとメモを見ている	説明が不十分である

3. 2 研究協力者

3. 2. 1 研究協力者（高校生 120 名）の概要

英語学習に対する意識調査を実施したところ、学習者の 53.8%が「英語で話すことに抵抗がある」、59.3%が「英語で話す時に間違えることが怖い」と考えていることがわかった。その一方で、「英語で話してみたい気持ちがある」と考えている学習者は 58.8%であり、英語で話すことへの抵抗感や不安を解消することが、英語で話すことへの意欲を高めることにつながると考えられる。

3. 2. 2 研究協力者教員（英語科 3 名）の指導方針

² 言語機能、発話内容、発話の複雑さ、発話の理解度の 4 観点を総合的に判断し、7つの「ステップ（段階）」に分けたもの。

教科主任を務める教員 A（勤務経験 7 年）はプレゼンコンテストの指導を積極的に行い、音声的な指導や ICT 活用に積極的である。公開授業や校外研修での学びを授業改善につなげており、学習意欲が低い学習者への支援方法についても関心がある。「自分の気持ちを伝えられるようになること」を授業の目標として、学習者が英語で自己表現する機会を授業に取り入れたいと考えている。教員 B（勤務経験 20 年以上）は卒業後に生かせる英語力の養成を目標としており、教員 A と共にプレゼンテーションの指導や資格試験の指導に携わっている。学習者の言葉や躓きから得られた気づきをもとに、「よりわかりやすい授業」を目指して、文献や他の教員の実践から授業改善を行っている。教員 C（勤務経験 20 年以上）は職業科生徒への指導経験が豊富な教員である。授業ではワークシートを活用した問題演習を中心に、基礎的な語彙力・文法力を養うことを目標としている。

3. 3. 分析方法

パフォーマンス評価については、例として表 3.1 に示したようなループリックを用いて、設定した観点について A～C の 3 段階で評価した。また、学習者にパフォーマンスの振り返りとパフォーマンス向上のための目標設定をさせる目的で、「スピーキングテストの振り返り」を実施した。実施時期は 5 月と 6 月に実施したパフォーマンステスト直後である。内容は自己のパフォーマンスについての自己評価と、自信の度合いを尋ねる質問で構成されている。また、筆者の授業改善と、学習者の英語で話すことに対する自信を調査する目的で、各学期の最後の授業時に「授業振り返りアンケート」を実施した。それぞれの自由記述の分析には、テキスト型（文章型）データを統計的に分析するソフトウェアである KH Coder (<http://kncoder.net/>) を使用し、自由記述の回答において出現率の高い語の検索や使用されている言葉の関係性について分析した。研究協力者教員には、実践したパフォーマンス評価とその効果や感想について聞き取り調査を行った。

4. 結果と考察

4. 1. 研究課題 1 について

4. 1. 1 学習者が英語で話す力への影響

実施したパフォーマンス評価における 2 観点の評価を数値化して比較した。観点①「伝える内容」は 5 月下旬の評価と 11 月末の評価を比較した。2 学期は指導上の理由から評価の観点を別の観点に変更したため、観点②「目線」は 5 月中旬と 6 月下旬の評価を比較した。パフォーマンステストの結果を数値化したものの平均値を算出し、2 つのテストにおける平均値の差を両側検定の t 検定により検討した。結果は、① $t(118)=-2.79, p < 0.01$ 、② $t(118)=-6.95, p < 0.01$ であり、設定した評価項目において平均値の差は 1%水準で有意であった。

授業アンケートにおいて、「ループリックが練習や勉強に役に立った」という質問に「そう思う」「とてもそう思う」と回答した学習者は 1 学期に 80 名 (69.0%)、2 学期は 100 名 (85.5%) であったことから、ループリックの活用は英語でのパフォーマンス向上に有効であると考えられる。

4. 2. 学習者の英語で話すことへの意欲への影響

5 月中旬と 12 月初旬に実施した授業アンケートにおける、①自信をもってパフォーマンスできたかどうか、②うまく英語で要約することができたかどうかの 2 点において、回答の結果について対応のある両側検定の t 検定により検討した結果、①と②においてこれらの平均値の差は有意ではなかった。その要因は 3 点考えられる。1 点目は練習が不足していたという学習者の認識である。授業で練習活動の時間が十分に取れなかったことや、考査期間の直前であったことが影響していることが、授業アンケートにおける自由記述からわかっている。2 点目は、ループリックの記述語があいまいであったことや、パフォーマンス改善に向けてのフィードバックが十分では

なかったために、基準となるパフォーマンスを学習者がイメージできなかったことである。3点目は、評価の観点となっている「発音」「イントネーション」が、短期的に学習成果が表れにくい技能や能力であったことが関係したと考えられる。

英語で話すことへの意欲の高まりについては有意な変化が見られなかったが、授業アンケートの記述には、「(今度のスピーキングテストでは) 基本文だけではなく応用できるように挑戦したい」など、自分の課題を見つけて挑戦する意欲を示す記述や、「アクセントや発音の仕方をもっと教えてほしい」「日常会話で使えるような表現を教えてほしい」という英語スキル向上への意欲をうかがわせる記述もあった。パフォーマンス評価によって学習者の学習意欲向上に一定の効果が期待できると考えられる。

4. 3 教員の協働についての効果の検証

4. 3. 1 研究協力者教員の実践と振り返り

研究協力者教員の実践とインタビューの結果から考察を述べる。教員 A や教員 B は、学習者のパフォーマンスから授業でどのように手立てを講じることができるかについて考えており、パフォーマンス評価が授業改善につながるフィードバックとなったことがわかる。また、教員 A、B は、学習者のパフォーマンステストへの感想や練習の様子などから、パフォーマンス評価のポジティブな効果を実感しており、3学期も継続して実施している。

また、「育成を目指す学習者像」の拠り所となる CAN-DO リストの見直しや、それに対応したルーブリック開発の必要性についての意見も得られた。パフォーマンス評価の実践は、学科としての指導方針の明確化にも寄与すると考えられる。

5. 教育的示唆と今後の課題

5. 1. 1 教育的示唆

パフォーマンス評価の目的は、学習者の学習促進と、教師の授業改善である。ルーブリックの機能を発揮させる上でも、教師がそのような認識を持って授業で活用することが必要である。ルーブリックの作成に当たっては、教師自身が授業を通じてどういった学習者を育成しようとしているかを明確に認識していることが重要であると同時に、学習者自身がどのような力をつけたいと望んでいるのかを把握しておくことも必要である。その際に、学科全体でパフォーマンス評価の実践に取組み、評価基準について他の教員と意見交換を行うことが有効であると考えられる。そのように課題や悩みを共有することが、同僚性を高め、教師の協働を促すと考えられる。

5. 1. 2 今後の課題

効果が見られなかった「英語で話す意欲」について、実践と検証を長期にわたって続けていく必要がある。今後もこの実践を継続し、パフォーマンス評価やルーブリックの学習効果を生かした授業実践の確立を目指したい。

6. 主な参考文献

- 安藤輝次(2014)ルーブリックの学習促進機能、*關西大學文學論集* 64(3), 1-25, 關西大學文學會
 今井裕之・吉田達弘編著(2007) *HOPE 中高生のための英語スピーキングテスト*, 教育出版
 田中博之(2016)「アクティブ・ラーニング実践の手引き—各教科等で取り組む『主体的・協働的な学び』」, 教育開発研究所
 松下佳代(2007)「パフォーマンス評価—子どもの思考と表現を評価する—」, 日本標準文部科学省
 Dörnyei (2001) *Motivational Strategies in the Language Classroom*. Cambridge: Cambridge University Press